

私の好きな場所

Place

VIDAコーポレーション社長
杉本大
Sugimoto Dai



不死の象徴とされる「火の鳥」やユーモラスな妖怪、打ち上げ花火などが浮かび上がり、夜の幻想的な世界を演出。昼間はワ

杉本家の復興を今一度……。私の生まれは大阪・茨木市。我が家では祖父母を含めた3世帯で生活していたのですが、今では世代交代が進んで空き家になっていきます。しかし、私は正月や盆暮れには必ず、杉本家の生家を訪れるようにしています。

杉本家は代々、文武両道の家系で、勉学に励むことはもちろん、スポーツにも熱心で、曾祖父はパリ大会から1964年の東京大会まで3回にわたりオリンピック水泳選手の監督を務め、父は卓球の国体選手、そし

題材にしたテーマパークの建設を計画したが、不況で出資金が集まらず断念した。それだけに「ニジゲンノモリ」は手塚ファン

した。

そんな我が家には「松来軒」と呼ばれる客間があり、大正ロマンを感じさせるソファやテーブル、昔ながらの掛け軸も飾ってあります。正月になると親戚一同が集まり、お膳を囲んで祖父や父をはじめ、親族で日本の将来について熱く議論していた光景が脳裏に焼き付いています。

ところが、核家族化の波は我が家にも押し寄せ、1人また1人と少しずつ人が減っていきました。私も東京に引っ越し、生家はとうとう空き家になってしまったわけですが、それでも自然と足が生家に向かうのです。とても静かで空気の張り詰める「松来軒」に身を置くと、凛とした雰囲気の中に、少しのわびしさを感ずる一方で、かつて賑わっていた杉本家の姿を思い出しては、ご先祖様から「頑張れ！」と励まされた気分にな

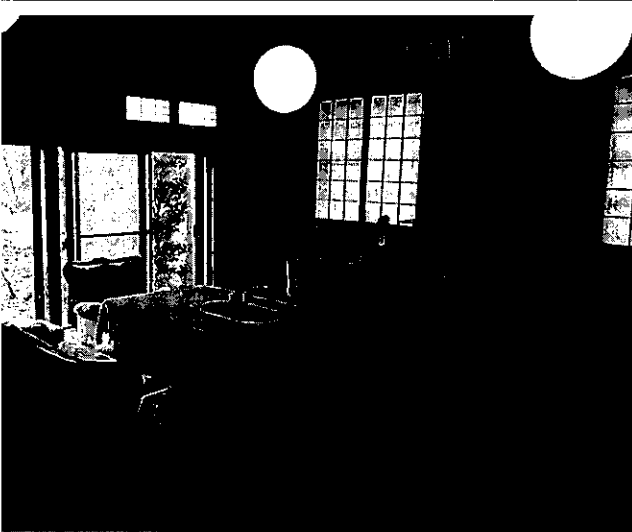
ど、社会性を帯びた数多くの問題提起がなされている。それだけに手塚研究は奥が深く、大阪では手塚学会を創ろうとい

自分のこれまでを振り返ると、学生時代は学校の看板を背負ってアイスホッケーの試合で戦い、サラリーマン時代は会社の看板を汚さぬよう、とにかくがむしゃらに働きました。そんな私は杉本家の長男として生まれてきたことで杉本家の看板を背負い、家を守ることが使命でした。

このモデルをシンガポールやドバイなどに輸出し、日本の漫画文化が海外で花開くことに期待を寄せる関係者は少なくない。

守っていると思っています。また、家庭でも子供に杉本家という看板の重みを伝えるため、子供を生家に連れて行っています。私の創業の根っこは杉本家。その意味では、生家は私にとってもパワースポットと言えます。

生家(大阪府・茨木市)



にある杉本社長の生家(写真は客間の「松来軒」)